日刊 動労千葉

87. 6. 20

No. 2581

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

国鉄「分割・民営化」反対！三里塚二期工事阻止！

鉄道労連、ついに崩壊の危機

鉄労が東鉄労本部から引きあげ（6/16）

すべての組合員のみなさん！　鉄道労連内における動労革マルと鉄労の対立が一層激化し、六月十六日には鉄労の専従役員五人全員が東鉄労本部（目黒、動力車会館）から引きあげるという事態にまで発展した。いよいよ鉄道労連の崩壊が始まったのだ。全国のたたかう仲間との連帯を強め、鉄道労連を最後的に解体しよう。

動労革マル、鉄労を批判

六月十六日の鉄労専従役員五人の引きあげで、鉄道労連の危機は決定的となった。

動労革マルは、鉄労と野合して鉄道労連を結成したにもかかわらず、「新会社」への移行後、いたるところで鉄労批判を開始した。

松崎は、当局・管理者を集めた講演の中で、「鉄労は御用組合でどうしようもない」などという発言をくり返し、さらに、一三三回動労臨時中央委員会でも「一方の組合の言うことだけを聞くというのが統一だと思ったら大きな間違い。すべてを譲る気はない」と公然と鉄労を批判してきた。

鉄労の役員を解任

こうした中で、盛岡地連では対立が表面化し、六月二日に開催された地連執行委員会を鉄労がボイコット、さらに同日行われた東鉄労委員長松崎の講演会への出席をもボイコットすることにより、地連の機能が実質上ストップしてしまった。

これに対し、動労革マル松崎は、六月六日、一方的に、〃再建大会〃を開き、強引に鉄労出身の役員の解任を強行したのである。

そして、鉄労が再三にわたって事情説明を求めても、「不在」を理由に拒否しているのだ。

こうした状況のもとで、鉄労は、六月十五日、東鉄労本部で開かれた専従者会議への出席を拒否し、十四時頃、持ってきたダンボールに荷物を詰め込んで、専従者が退出し、翌、十六日の十一時頃、鉄労出身専従者が再びおとずれ、まとめてあったダンボールを持ち、東鉄労本部から引きあげてしまったのだ。

鉄道労連の崩壊は決定的

すべての組合員のみなさん。

もはや鉄道労連の崩壊的危機は決定的です。

そもそも鉄労は、七〇年代マル生当時からの御用組合であり、国鉄労働者にとって恨みの的であった。

また、一方の動労革マルも、三里塚闘争に一貫して敵対し、闘う国鉄労働者には暴力をもって襲いかかるというファシスト組合である。こんな連中が野合する鉄道労連が絶対にうまくいくはずがない。まだまだ今回のような矛盾が噴き出してくるのは明らかだ。

全国のたたかう国鉄労働者との連帯を強化し、動労総連合のたたかいをさらに推し進め、鉄道労連を最後的に解体するために奮闘しよう。

動労との亀裂決定的

東日本鉄道労連本部　鉄労が役員引き揚げ

労使協調路線をとり、鉄道労連を結成していた鉄労と動労の対立が強まり、東日本鉄道労連本部（東鉄労）から十六日、鉄労の専従役員全員が引き揚げた。鉄労側では動労出身で東鉄労の委員長をしている松崎氏の委員長辞任を強く要求しており、国鉄改革をめぐって協力体制にあった鉄労と動労の関係に深い亀裂が生じたことになる。

鉄労と動労の直接の対立のきっかけはJRグループが誕生した直後に、東鉄労盛岡地方本部の鉄労出身の副委員長らが松崎委員長の会合に欠席したこと。この行動に対して松崎委員長は〃再建大会〃を開き、強引に鉄労出身のこの副委員長を解任した。

鉄労側では十五日から松崎委員長に事情説明を求めようとしたが、「不在」を理由に鉄労と動労のトップ会談はできない、断絶状態が続き、十六日にも再度、面会を求めたが、事実上、拒絶され、役員五人の総引き揚げに踏み切った。

この対立の背景には鉄道労連を今年二月に結成、単一組合へむけて大猿の仲といわれていた鉄労と動労が合体する動きが強まっていたなかで、動労が鉄労の組織に介入したり、動労のなかに革マルの指導を受けている組合員が含まれているのではないかという不信感があるとみられている。

東鉄労での鉄労と動労の対立により、鉄道労連は最大の危機をむかえ、新会社としてスタートしたばかりのJRグループも労使一体にかげりが出るのではないかと注目されている。

（6月17日サンケイ）

さらに解体の追撃を！

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！